

# 高齢者の読書環境調査

—石川県内におけるケアハウス入居者を対象に—

北陸学院短期大学

高 島 涼 子  
真 砂 良 則  
菅 原 創

## 1. はじめに

日本の平均寿命は、厚生労働省が7月22日に発表した2004年簡易生命表では、男性78.64歳、女性85.59歳で、男女とも5年連続で過去最高を更新したことになる。65歳以上人口は2004年9月15日現在推計で、2484万人で、総人口の19.5パーセントを占めている。県別では、25パーセントを超えているのは、島根県(26%)、秋田県(25%)で、20パーセントを超えている県はこの2県の他に24県にのぼる<sup>1)</sup>。

一方、高齢者の読書状況は「書籍・雑誌・総合読書率(2000－2004年)」(表1)に見られるように、書籍・雑誌のいずれも読まないと回答した人々が読むと回答した人々よりも多い結果となっている。他の世代として30代と比較すると読まない率の高さがより鮮明になる。この結果は、高齢者は本を読まない、図書館はまず若い人々へのサービスを優先すべきである、といった考えを正当化するものである。

しかし、高齢者は果たして読書へのニーズを持たないのであろうか。様々な障害や制約のために読まないのではないだろうか。「読まない」のではなく、「読めない」のではないか。私たちはそのように考え、障害や制約を明らかにすることによって、それらを取り除き、あるいは軽減することによって、高齢者の読書に対してのニーズに応えることができるのではないかと考えたのが、本調査実施のきっかけであった。様々なニーズの中で私たちはまず高齢者の読書環境がどのようなものであるかを調査した。また、読書と図書館との関係も知りたいと考えた。

表1 「書籍・雑誌・総合読書率(2000－2004年)」  
(数字はパーセント、無回答は除く)

		総合		書籍		雑誌	
		読む	読まない	読む	読まない	読む	読まない
2000年	30代	90	9	52	45	86	12
	60代	77	20	46	46	74	23
	70代以上	59	37	38	53	53	41
2001年	30代	92	7	63	33	90	9
	60代	81	14	49	37	78	17
	70代以上	69	24	45	41	64	27
2002年	30代	84	14	59	38	76	22
	60代	69	28	46	50	58	39
	70代以上	57	38	42	51	47	46
2003年	30代	75	22	48	47	66	27
	60代	52	37	34	54	47	34
	70代以上	38	50	24	62	35	48
2004年	30代	81	14	56	42	70	28
	60代	65	31	44	51	55	41
	70代以上	45	47	30	60	35	54

『読書世論調査』2001年版－2005年版 毎日新聞社 2001－2005年より

住民の最も身近にある市町村立図書館は連日高齢の来館者を迎えている。しかし、高齢者のニーズを明確に捉え、そのニーズに対応したサービスを提供している、あるいは高齢者志向のサービスを提供していると明言できる図書館はそれほど多くない<sup>2)</sup>。また、高齢者施設で読書を重視した施設・設備を備えていたり、図書館からサービスを提供されていたりする施設も多いとはいえない。

図書館の側からは高齢者のニーズに即したサービスの提供を、福祉の側からは、高齢者のQOL (Quality of Life 生活の質) という観点から高齢者の生活の向上を、それぞれ実現していくための資料として、高齢者の読書ニーズの調査が肝要であると考え、図書館学からの高島と高齢者福祉学からの真砂の共同研究として調査を実施した。菅原はアンケート調査集計及び分析に関わった。

まず読書について生活の中で占めている位置を知り、次に、読書の環境や読書状況、読書習慣について知ることを第一の目的とした。今回は初めての調査なので、読書ニーズについてはそうした読書環境の中から汲み取ることができる程度にとどめることとした。

## 2. 研究方法

調査対象は、石川県内に立地するケアハウス（介護利用型軽費老人ホーム、以下「ケアハウス」という）<sup>3)</sup>のうち、予め無作為に抽出した9施設の入居者とした。9施設に調査依頼文、調査票を送付し、入居者への配布を依頼した。

調査対象をケアハウスの入居者としたのは、他の入所型施設の高齢者に比べ心身の機能が保たれており、読書や読書に関連する活動（書物の購入、図書館の利用等）を行うことが可能で、読書に関するニーズがあると推測されるためである。

調査票は無記名による質問紙で、自己記入による回答を原則とした。ただし、障害等により自己記入の回答ができない場合等は、施設の相談員等の職員による代理記入とした。

調査項目は入居者の基本属性等に関する10項目と、読書及び関連事項の実態と意識に関する15項目とした。基本属性等に関する項目のうち、本報告で使用したものは、①性別、②満年齢、③要介護度、④障害老人の日常生活自立度、⑤痴呆性（認知症）<sup>4)</sup>老人の日常生活自立度、⑥視力、⑦最終学歴である。読書及び関連事項の項目のうち、本報告で使用したものは、⑧余暇の過ごし方、⑨読書頻度、⑩読書をしない理由、⑪平均読書時間、⑫本の入手経路、⑬本に関する情報入手、⑭読書をする上での不満、⑮不満の内容、⑯図書館サービスの認知度、⑰読書に関して望むサービス、⑱読書の意味、⑲読書が好きかどうか、⑳若い頃の読書習慣、㉑若い頃の図書館利用である。

調査実施期間は2005年2月から同年5月の間までであった。9施設の総定員665名のうち、調査協力が得られた344名から有効回答を得たのでこれを調査対象者とする。

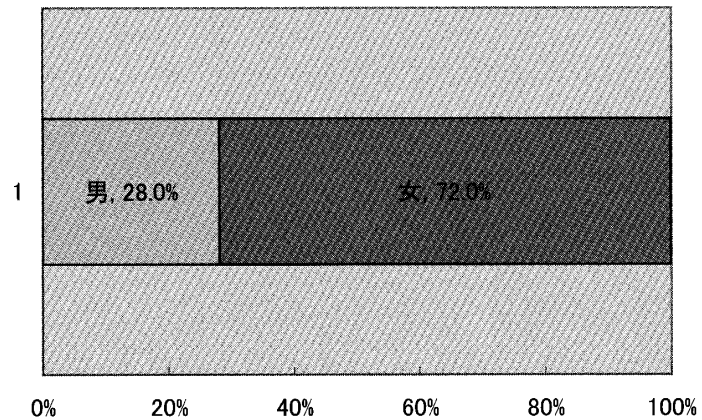
### 3. 結果及び考察

#### 1) 調査対象者に関する基本的属性

##### ① 性別

本調査の対象者の性別は、図1「性別」に示したように、男性27.6%、女性70.9%という割合であった。全国的な状況として、ケアハウス1,179施設を対象に行われた『ケアハウスにおける生活支援機能のあり方に関する研究報告書』（以下、『報告書』という）<sup>5)</sup>によれば、入居者の性別は男性25.9%、女性73.8%となっている。本調査の性別の割合は、全国的な傾向とほぼ同様の結果となっているといえよう。

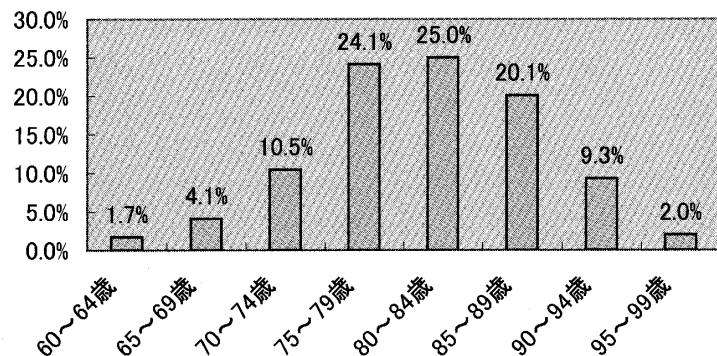
図1 「性別」



##### ② 満年齢

調査対象者の年齢構成を「年齢」（図2）でみてみると、80～84歳が25.0%で最も多く、次いで75～79歳の24.1%、85～89歳の20.1%、70～74歳の10.5%、90～94歳の9.3%などの順となっている。平均年齢は81.2歳であった。報告書においては入居者の平均年齢は79.6歳となっており、本調査の場合は全国の状況よりも、対象者の平均年齢がやや高くなっている。

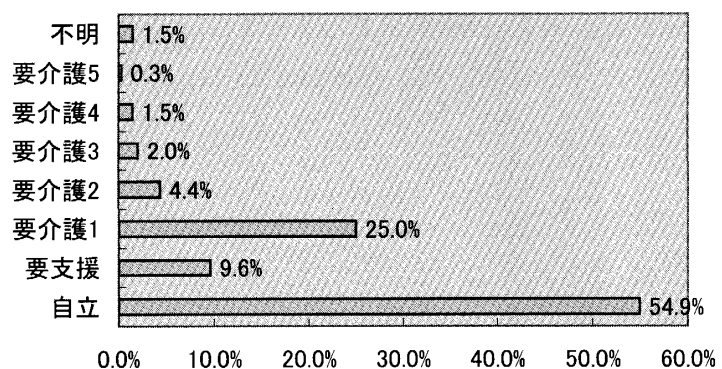
図2 「年齢（5歳ごとに区分）」



##### ③ 要介護度

対象者の介護保険制度における「要介護度」（図3）は、「自立」（非該当）が53.8%で最も多く、以下、「要介護1」の25.0%、「要支援」の9.6%、「要介護2」の4.4%、「要介護3」の2.0%、「要介護4」の1.5%、「要介護5」の0.3%という順であった。「自立」（非該当）から「要介護2」までで全体の92.8%を占めている。また、「要介護3」

図3 「要介護度」



以上の中度、重度の要介護者は3.8%であった。

もともとケアハウスは、「自炊ができない程度の身体機能の低下等が認められるもの」を対象にした施設であることを考えれば、比較的軽度の利用者が多数を占めるのはもつともなことといえよう。しかし、その一方で少数とはいえ、中度重度の利用者が含まれている。

介護保険制度の施行後、ケアハウスの一部に「ケア付き」の特定施設が登場したことや訪問介護（ホームヘルパー）などの在宅サービスの利用ができるようになったため、従来であれば退所せざるを得なかった中度重度の利用者も、住み慣れたケアハウスで生活を継続していると推測できる。

なお、『報告書』によれば、要介護認定を受けたものは、「要介護1」が50.0%で最も多く、以下、「要支援」27.6%、「要介護2」の12.9%、「自立」（非該当）の4.1%と続いており、「自立」（非該当）から要介護度2までで全体の94.6%を占めている。

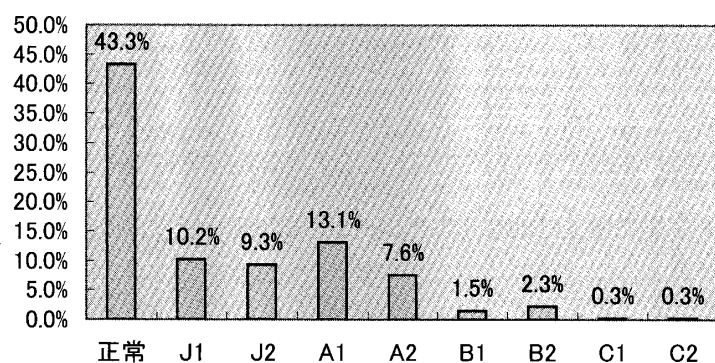
本調査より全国状況のほうが、要介護度は重くなっているが、これは『報告書』においては要介護認定を受けていないもの（対象者の約50%を占め、その多くは自立と推測される）が含まれていないためである。

#### ④ 障害老人の日常生活自立度

対象者の身体状況を「障害老人の日常生活自立度判定基準」（図4）でみると、「ランクJ」（生活自立）が62.9%と最も多く、以下、「ランクA」（準寝たきり）が20.7%、「ランクB」（寝たきり）が3.8%、「ランクC」（寝たきり）が0.6%という結果であった。

日常生活自立度について、自立や比較的軽度の入居者が多数を占めているが、ごく一部とはいえ寝たきりの入居者が含まれていることがわかる。

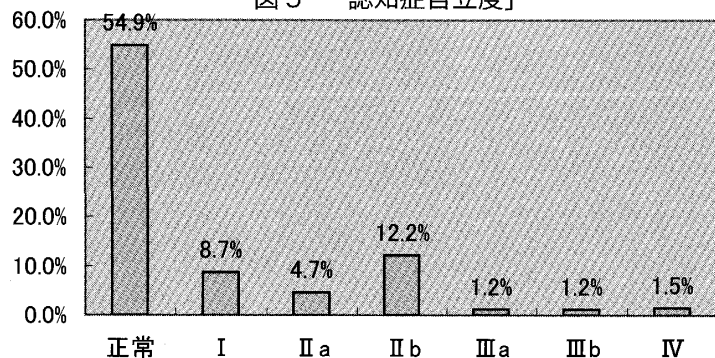
図4 「障害自立度」



#### ⑤ 認知症老人の日常生活自立度

対象者の認知症の状況を「認知性老人の日常生活自立度」の判定基準（図5）からみると、「自立」（正常）が54.9%と最も多く、以下、「ランクⅡ」（誰かが注意していれば自立）の16.9%、「ランクⅠ」（家庭内、社会的にほぼ自立）の8.7%、「ランクⅢ」（介護を必要とする）の2.4%、「ランクⅣ」

図5 「認知症自立度」



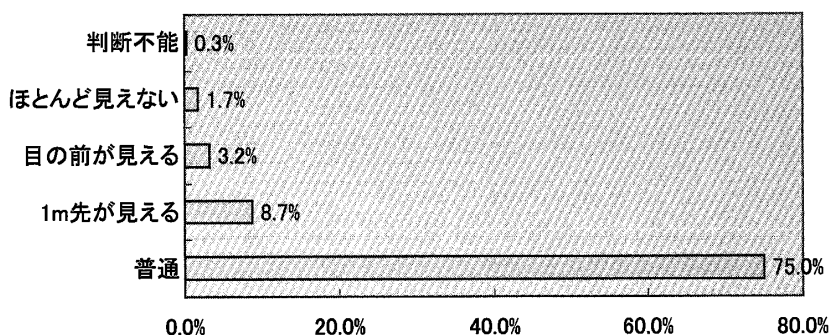
(常に介護を必要とする)の1.5%と続いている。

障害老人の日常生活度の場合と同様、認知症に関しても自立や比較的軽度の入居者が多数を占めるが、ごく一部に介護を要する入居者が含まれている。

⑥ 視力

対象者の視力の状況を「視力」(図6)でみると、「普通(日常生活に支障がない)」が75.0%、「1 m離れた視力確認表の図が見える」が8.7%、「目の前に置いた視力確認表が見える」が3.2%、「ほとんど見えない」が1.7%であった。

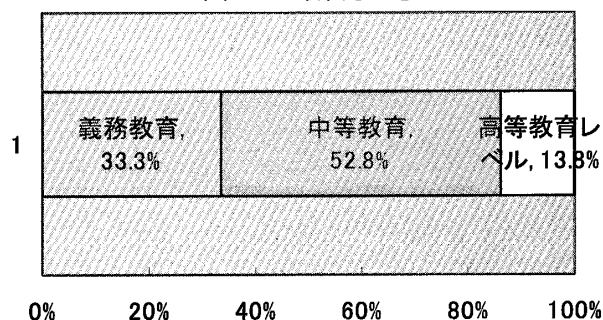
図6 「視力」



⑦ 最終学歴

対象者の最終学歴を、本報告では複数項目の相関関係を見るために便宜上義務教育（尋常小学校など）、中等教育（旧制中学校、高等女学校など）、高等教育（旧制大学、高校、高等専門学校など）の3つに区分した。図7「最終学歴」に示したように、中等教育が52.8%で最も多く、次いで義務教育の33.3%、高等教育の13.8%という順であった。

図7 「最終学歴」

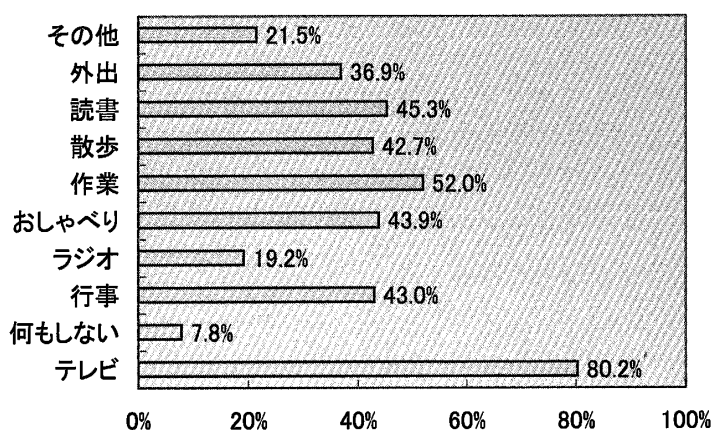


## 2) 読書及び関連事項に関する質問

## ⑧ 余暇の過ごし方

「余暇をどのように過ごしていますか」と複数回答で尋ねたところ、図8「余暇の過ごし方」に示したように、「テレビを見ている」が80.2%と最も多く、次いで「作業（掃除や洗濯物たたみなど）をしている」の52.0%、「読書をしている」の45.3%、「他の利用者とおしゃべりをしている」の43.9%、「施設の行事やクラブ活動に参加している」

図8 「余暇の過ごし方」



の43.0%、「散歩をしている」の42.7%、「外出する」の36.9%、「その他」の21.5%、「ラジオ」の19.2%、「何もしない」の7.8%という結果であった。

国レベルの調査として『平成10年度 高齢者の日常生活に関する意識調査結果』<sup>6)</sup>がある。この中で、高齢者の日常的な楽しみとして「テレビ、ラジオ」が79.7%で最も多く、次いで「新聞、雑誌」が43.9%、「仲間と集まったり、おしゃべりをしたり、など親しい友人、同じ趣味の人との交際」が34.4%、「旅行」が31.7%、「家族との団らん、孫と遊ぶ」が29.0%などとなっている。

両調査から、高齢者にとってテレビが最も関係が深く2位以下を大きく引き離している点や、テレビ以外では読書が上位を占めていることが共通しているといえよう。

### ⑨ 読書頻度

「あなたは1ヶ月の間に、どれくらい読書をしますか」<sup>7)</sup>という問いに対しては(図9)、「時々読む」が37.8%で最も多く、次いで「よく読む」の23.0%、「あまり読まない」の19.5%、「まったく読まない」18.9%という順であった。「よく読む」と「時々読む」をあわせると57.8%となり、半数以上のものが比較的、本を読んでいるということになる。

図9 「読書頻度」

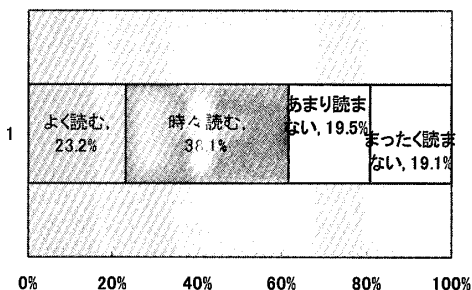
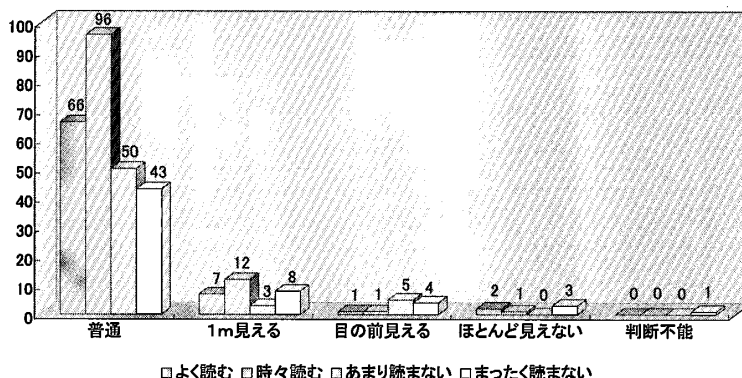


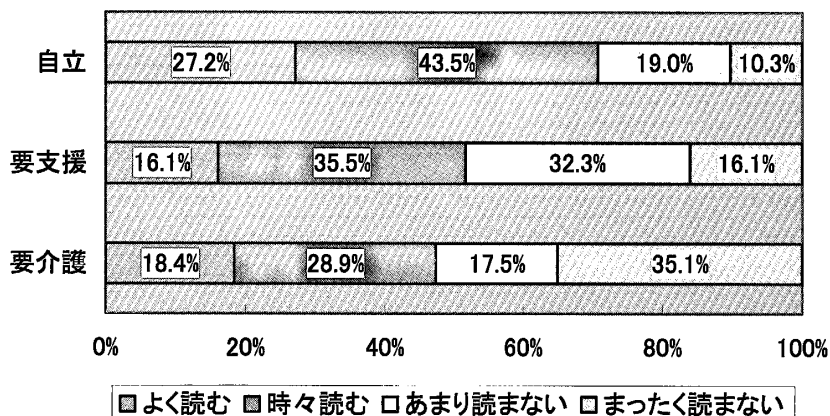
図10 「視力と読書頻度のクロス表」



読書頻度と視力を見てみると(図10)、見える人ほど読書頻度が多くなっていた。 $(\chi^2=7.096, p<.01)$  [クロス集計の有意差検定のため、 $\chi^2$ 値を用いた連関の分析を行った。]。

読書頻度と要介護度との関係においても、自立度が高いものほど本をよく読んでいた。 $(\chi^2=8.031, p<.01)$ 。視力や介護度といった身体状況が読書頻度と深い関係にあるといえる。(図11)

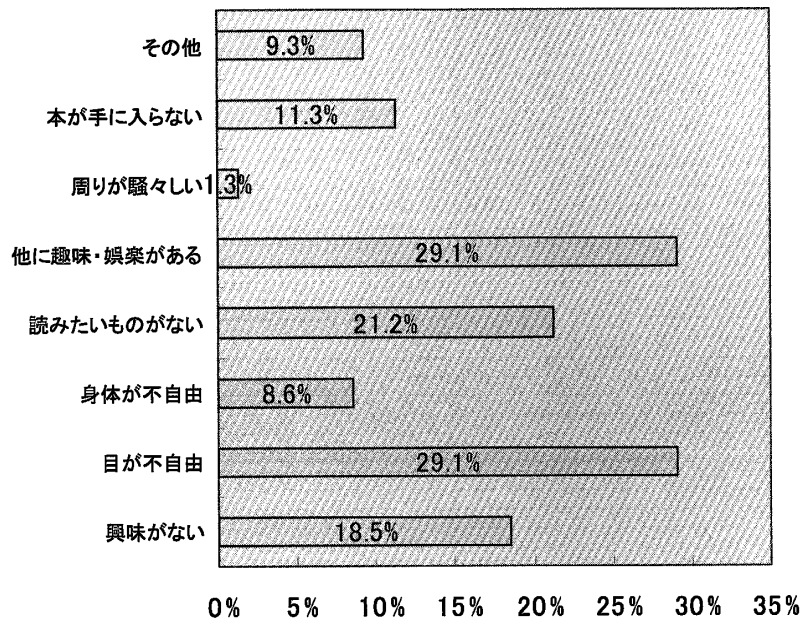
図11 「要介護度と読書頻度」



# ⑩ 読書をしない理由

前問で、「あまり読まない」「まったく読まない」者に対して、読書をしない理由を複数回答で尋ねたところ（図12）、「目が不自由だから」と「他に趣味・娯楽がある」がそれぞれ29.1%で最も多く、次いで「読みたいものがないから」が21.2%、「興味がない」が18.5%、「自由に書籍等が手に入らないから」が11.3%、「その他」9.3%、「身体が不自由だから」が9.3%、「周りが騒々しいから」が1.3%という結果であった。

図12 「読書をしない理由」

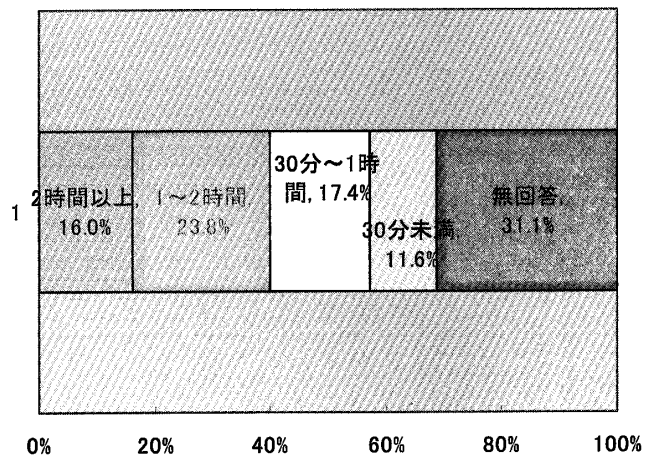


前問において読書頻度は、視力や要介護度と関連していると述べた。実際、読書をしない理由として、目や体の不自由さをあげている。特に視力の問題をあげるものが多くなっている。一般に高齢になると「本を読まなくなる」といわれているが<sup>8)</sup>、むしろ加齢そのものよりも加齢に伴って生ずることが多くなる視力や体の障害が影響を及ぼしているといえよう。

# ⑪ 平均読書時間

⑨の「読書頻度」において「よく読む」「時々読む」と答えたものに対し、一日あたりの平均読書時間を尋ねたところ（図13）、「1時間以上、2時間未満」が34.6%で最も多く、次いで「30分以上、1時間未満」が25.3%、「2時間以上」が23.2%、30分未満が16.9%という結果であった。

図13 「読書時間」



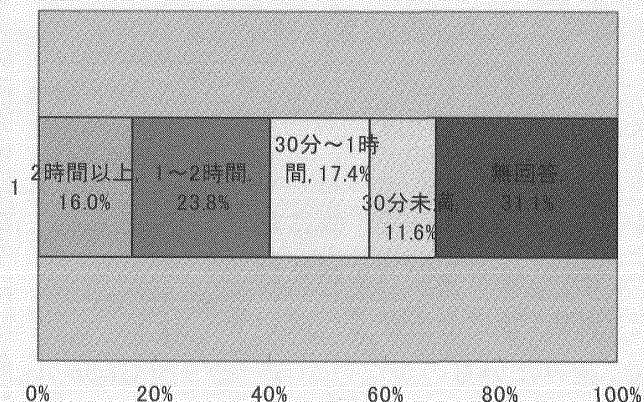


## ⑫ 本の入手経路

「どのように書籍、雑誌等入手しますか」と複数回答で尋ねたところ(図14)、「施設で図書を借りる」が41.1%と最も多く、次いで「店頭で購入する」34.3%、「家族に持ってきてもらう」31.7%、「その他」17.7%、「図書館で借りる」10.9%、「職員に購入を頼む」2.6%という順であった。

「施設で図書を借りる」ものが最も多くなっているが、入居している高齢者にとっては、施設から本を借りるのが最も手軽な入手経路といえる。しかし、「店頭での購入」や「図書館で借りる」場合などは必要な本を入手するというだけでなく、社会参加などの意味が含まれてくる。また、「家族にもってきてもらう」場合は、家族関係の維持などの意味も含まれてこよう。いずれにしても、多様な入手経路を確保し、状況に応じて選択できることが望ましい。

図14 「入手経路」



## ⑬ 本に関する情報入手

「本、雑誌等に関する情報はどのように入手していますか」と尋ねたところ(図15)、「本、雑誌、新聞、テレビ」が64.3%と最も多く、次いで「家族」20.9%、「店頭」19.6%、「友人・知人」13.6%、「その他」12.3%、「職員」8.1%、「インターネット」1.3%という順であった。

「本、雑誌、新聞、テレビ」から情報を得ているものが最も多いが、情報の内容としては、本に関する広告、書評、ベストセラーに関する情報、などであろう。また、インターネットによる情報を得ているものは最も少ない割合であったが、高齢者のパソコン使用の普及により、今後は少しずつ増えていくことが予想される。

図15 「情報入手経路」

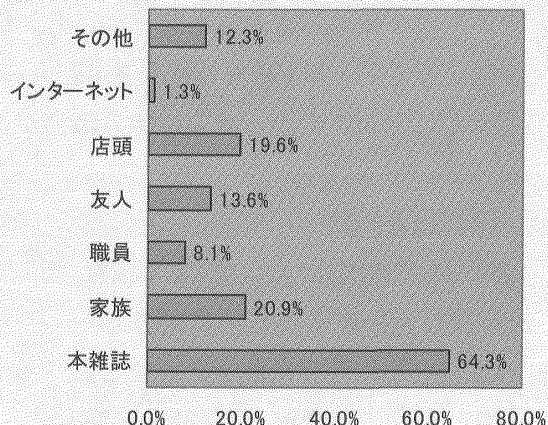
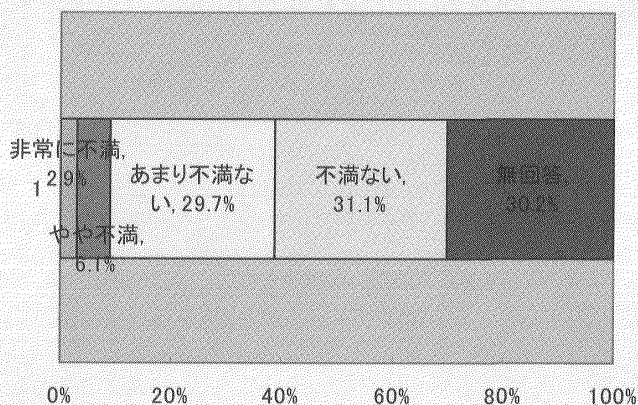


図16 「読書に関する不満」



## ⑭ 読書に関する不満

「現在、読書をするうえで不満がありますか」と尋ねたところ(図16)、「まったく不満がない」が31.1%と最も多く、次いで「あまり不満がない」29.7%、「やや不



満である」6.1%、「非常に不満である」2.9%、無回答が30.2%という順であった。

不満のない者、不満のある者で分ければ、60.8%と9.0%になり、多くの者は不満を持っていないといえる。

なお、読書に関する不満と読書時間との間には、有意な関連は見られなかった。

#### ⑮ 不満の内容

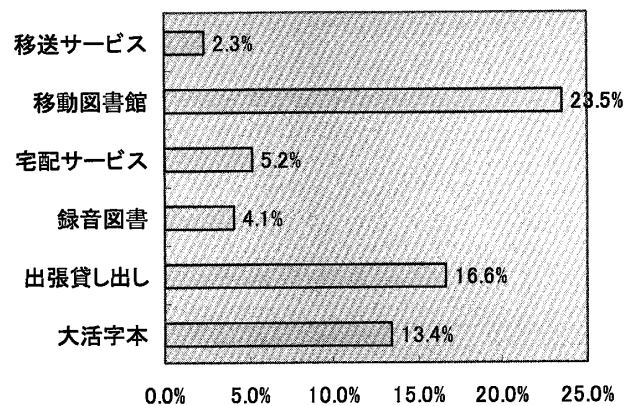
前問で「非常に不満である」「やや不満である」と答えたものに対し、「具体的にはどのようなことですか」と自由記述で尋ねたところ、視力や目の疲れに関するものが13件、読みたい本が入手できないことが5件、本に関する情報が少ないというものが1件、身体の不自由さについてが1件であった。

⑩の「読書をしない理由」においては、目の不自由さをあげる者がもっとも多かったが、読書をしている者にとっても、視力が不満の原因になっていることがわかる。

#### ⑯ 公共図書館サービスの認知度

公共図書館で行われているサービスについて知っているかどうかを複数回答で尋ねたところ(図17)、「移動図書館」について知っている者が23.5%で最も多く、次いで「出張貸し出し」(団体貸出)16.6%、「大活字本」13.4%、「宅配サービス」5.2%、「録音図書」4.1%、「移送サービス」(図書館への送迎サービス)2.3%という順であった。

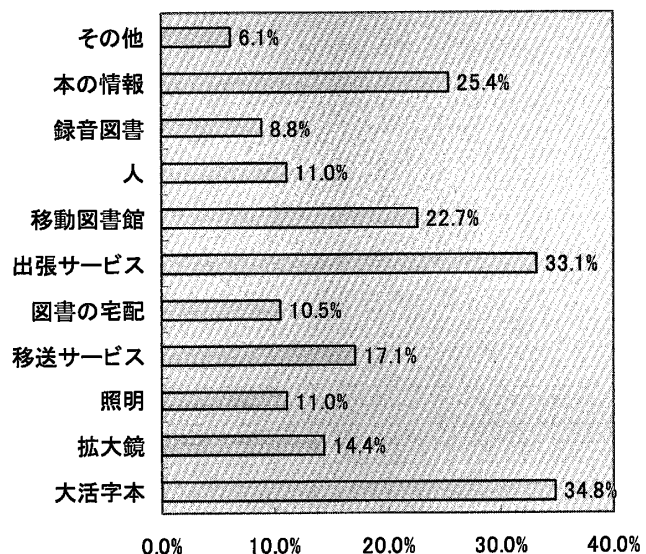
図17 「図書館サービスの認知度」



#### ⑰ 読書に関して望むサービス

読書に関して望むサービスを複数回答で尋ねたところ(図18)、「大活字本」が34.8%で最も多く、次いで「出張貸し出し」の33.1%、「本等に関する最新の情報の提供」の25.4%、「移動図書館」の22.7%、「移送サービス」の17.1%、「拡大鏡」の14.4%、「照明」の11.0%などの順であった。

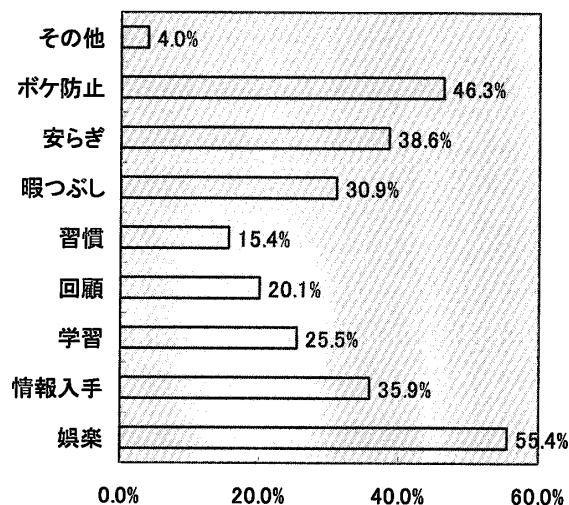
図18 「希望するサービス」



# ⑮ 読書の意味

「あなたにとって読書はどのような意味を持っていますか」という問いに対しては(図19)、複数回答で「娯楽、楽しみ」が55.4%で最も多く、次いで「ぼけ防止」の46.3%、「心のやすらぎ」の38.6%、「情報収集」の35.9%、「暇つぶし」の30.9%、「生涯学習」の25.5%、「懐かしみ、回顧」の20.1%、「習慣」の15.4%という順であった。

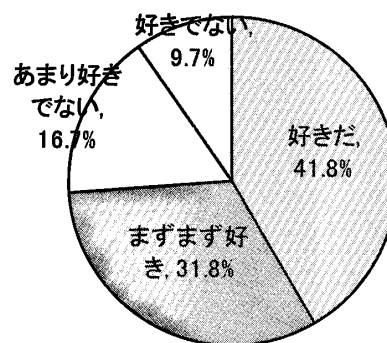
図19 「読書の意味」



# ⑯ 読書好き

「あなたは読書が好きですか」という問いに対しては(図20)、「好きである」が41.8%で最も多く、次いで「まずまず好きである」が31.8%、「あまり好きではない」が16.7%、「好きではない」が9.7%という結果であった。「好きである」「まずまず好きである」をあわせると、73.6%の者が、程度の差こそあれ読書好きということがいえる。

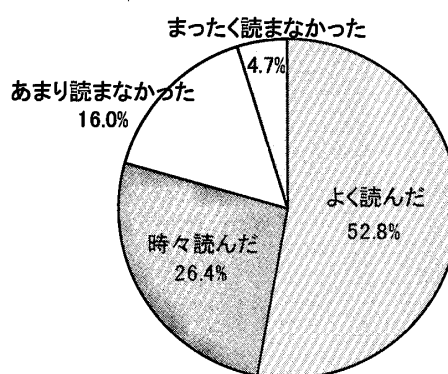
図20 「読書が好きかどうか」



# ⑰ 若い頃の読書習慣

「若い頃の読書習慣はいかがでしたか」という問いに対しては(図21)、「よく読んだ」が52.8%で最も多く、次いで「時々読んだ」が26.4%、「あまり読まなかった」16.0%、「まったく読まなかった」4.7%という順であった。

図21 「若い頃の読書」



若い頃の読書習慣と現在の読書頻度との関係をみると(図22)、若い頃に本を読んだものほど現在もよく読んでいるといえる( $\chi^2=55.516$ ,  $p<.01$ )。若い頃の読書習慣と学歴との関係をみると(図23)、学歴の高いものほど若い頃に読書習慣があったといえる( $\chi^2=16.965$ ,  $p<.01$ )。若い頃の読書習慣と現在の読書に関する不満の関係については、有意差はみられなかった。

# ⑱ 若い頃の図書館利用

「若い頃に図書館を利用したことがありますか」との問いに対しては(図24)、「まったく利用しなかった」が35.0%で最も多く、次いで「時々利用した」が31.1%、「あまり利用しなかった」

が19.5%、「よく利用した」が14.4%であった。

若い頃の図書館利用と現在の読書頻度の関連をみると(図25)、図書館を利用していた者ほど現在においてよく本を読んでいるといえる( $\chi^2=36.385$ ,  $p<.01$ )。若い頃の図書館利用と学歴との関係を見てみると(図26)、学歴が高いほど若い頃の図書館利用が多いことがわかる( $\chi^2=15.624$ ,  $p<.01$ )。また、若い頃の図書館利用と読書に関する不満との関係を見てみると(図27)、若い頃に図書館を利用した者ほど現在における読書の不満が強いといえる( $\chi^2=9.699$ ,  $p<.01$ )。

## さいごに

高齢者のニーズ調査としては、石川県内でのケアハウス入居者400名未満という非常に限定された調査で、この結果のみではニーズの把握は困難である。今後種々の高齢者施設入所者、また可能ならば在宅の高齢者を対象にした調査を継続していきたいと考えている。また、図書館の利用を中心にした調査や内容にまで踏み込んだ読書調査も実施したいと考えている。本調査の当初にかかげた目的に到達したとは言いがたく、高齢者のニーズを把握し、その対応への満足度を評価するためには、今後多くの調査や研究が必要である。

図22 「若い頃の読書経験と読書頻度」

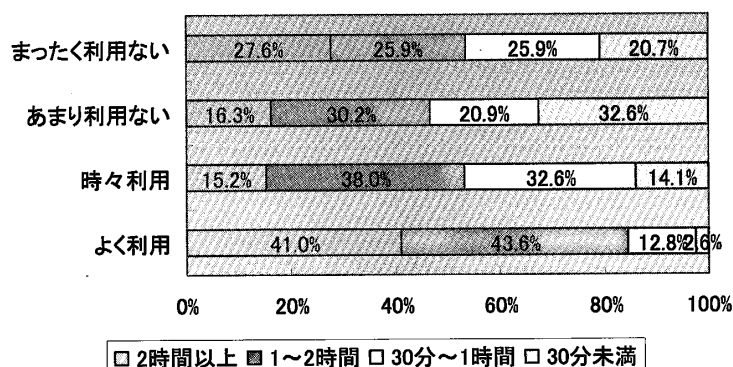


図23 「学歴と若い頃の読書経験」

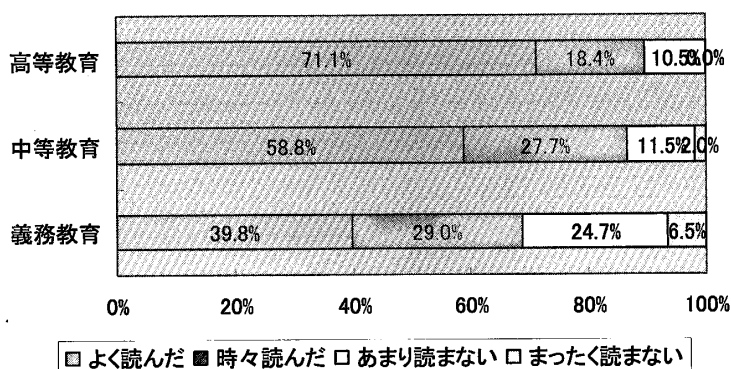


図24 「若い頃の図書館利用」

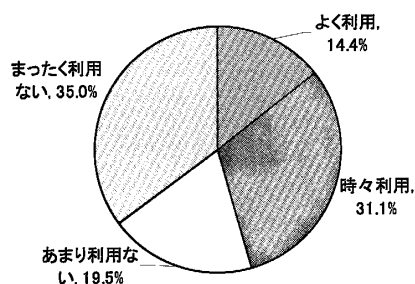
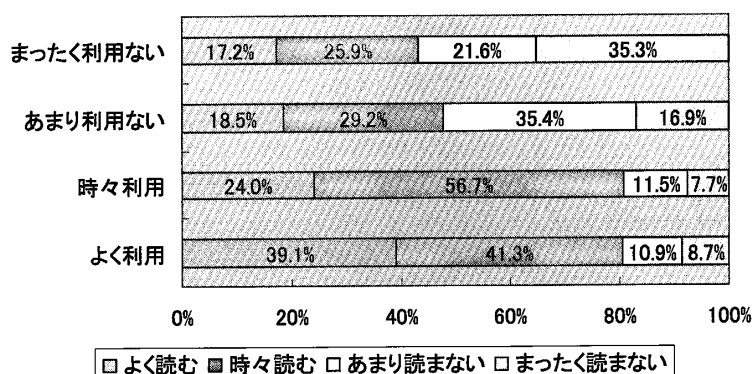


図25 「若い頃の図書館利用と読書頻度」



一方、限定されてはいるが、高齢者のニーズの一端を垣間見ることができた。視力の衰えに対しては、欧米では多様な媒体が提供されている。大活字本（日本のように視覚障害者を対象とした活字が大きいために通常の文字であれば1冊のものが数冊にもなる大きな活字ではなく、版型を一回り大きくする程度の大活字を使用している）や録音図書が同時に刊行され、書店でも通常の文字の図書と同じ装丁で一緒に陳列されている。コンピュータのキーボードにも拡大文字が使用されており、高齢者への配慮がなされている。高齢者の関わる場所では何らかの視力への対応が必要である。

施設内で図書が提供されることへのニーズの存在も知ることがで

きた。図書館はサービス対象地域内にある高齢者施設と団体貸出について検討することができる。

私たちは、高齢者はニーズを持っはいるが潜在的であり、要求という形にはなっていないのではないかという仮説を立てたが、この調査結果から、ある程度その片鱗がうかがえたのではないかと考えている。本調査を取り掛かりとして、今後も高齢者のニーズの把握につながる調査研究を継続していきたい。

最後に、この調査に協力して下さった高齢者の方々、アンケート配布を快諾し、協力して下さった各施設の皆様に心より感謝申し上げる。

## 注

1) <http://www.stat.go.jp/data/topics/topics091.htm>

及び <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2002np/zuhyou/05k3f-12.xls>

2005年10月4日アクセス

2) 全国図書館調査には高齢者サービスの項目はなく、実態を把握することはできない。また、「高齢者サービス」の概念が図書館界では確立されておらず、アメリカ合衆国のように、通常の、来館しての貸出やレファレンス・サービスは高齢者サービスの範疇に入れない場合もあり、明確にする必要がある。筆者（高島）は、貸出やレファレンス・サービスも日本の場合は高齢者サービスに含める方がいいのではないかと考えている。図書館サービス自体全ての住民に提供されているとはいいがたい現状では、貸出やレファレンス・サービスも高齢者のニ

図26 「学歴と若い頃の図書館の利用状況」

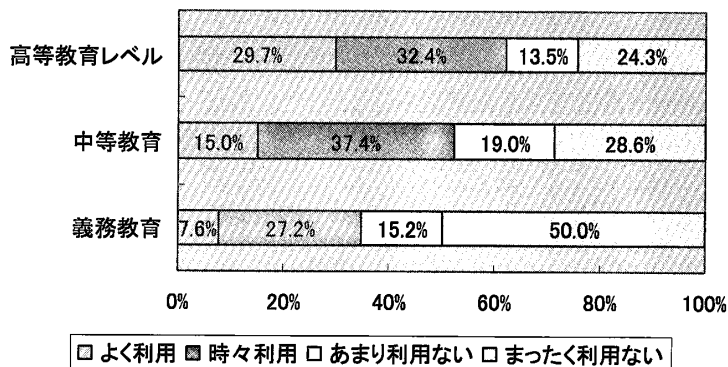
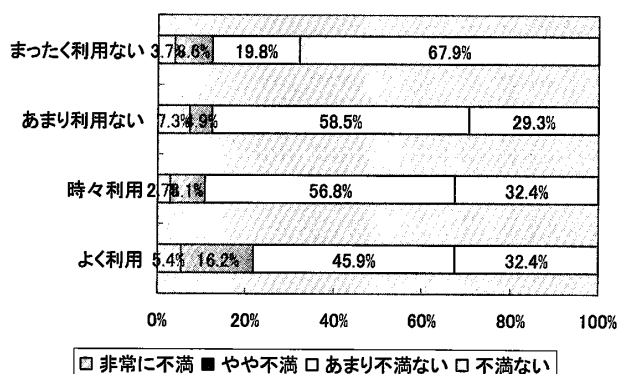


図27 「若い頃の図書館の利用状況と読書の不満」



## 高齢者の読書環境調査

ズに十分応えているとはいえないからである。(学会発表拙稿「高齢者生涯教育における図書館の役割」『京都市大学生涯教育学・図書館情報学 研究』2005 年 第4号 pp.195-202 参照)

- 3) 老人福祉法に基づく長期入所型の「老人福祉施設」には特別養護老人ホーム、養護老人ホーム、軽費老人ホームがある。さらに、軽費老人ホームにはA型、B型、ケアハウスの三種類の施設がある。これらの施設は、入所条件(身体状況・精神状況、経済的条件、環境上の理由)や利用手続き等に違いがある。入所条件に関して、まず心身の状況については、自炊ができる健康状態にある軽費老人ホームB型、給食付の軽費老人ホームA型・ケアハウス、一部介助を要する養護老人ホーム、常時介護を要する特別養護老人ホームの順に、入所条件としての健康度は低下する。経済状況については、利用に要する費用は原則として利用者の負担である軽費老人ホームB型、基本利用料の2倍程度以下の収入である軽費老人ホームA型、被保護ないし低所得層である養護老人ホームの順に経済的階層は低下する。しかし、ケアハウスと特別養護老人ホームには経済的条件が加味されていない。これらの施設数は、平成15年の『厚生労働白書』によれば、全国で特別養護老人ホーム5,084、養護老人ホーム959、軽費老人ホームA型242、同じくB型34、ケアハウス1,566となっている。

ケアハウスは、これらの施設の中では新しいタイプの施設で、1989年に創設されている。入居者は、「自炊ができない程度の身体機能の低下等が認められ、又は高齢等のため独立して生活するには不安が認められる者であって、家族による援助を受けることが困難なもの」となっている。年齢要件は、原則として60歳以上の者(夫婦の場合は、どちらか一方が60歳以上)である。虚弱になっても出来るだけ自立した生活が送れるよう、建物全体はバリアフリーで車椅子の使用が可能となっている。居住スペースはミニキッチン付の個室(6畳程度以上)、共同の食堂や浴室が基本である。生活相談、給食、入浴、緊急時対応などのサービスが受けられるが、介護職員や看護師は常駐していないため、介護を要するようになれば退所しなければならない。しかし、2,000年に施行された介護保険制度により、ケアハウスの一部にケア付きの「特定施設」が登場した。特定施設の指定を受けたケアハウスは、介護サービスを提供することが可能となった。一方、「特定施設」の指定を受けていないケアハウスでも、介護保険で「要支援」以上の認定を受けた入居者は、ホームヘルパー(訪問介護)やデイサービス(通所介護)といった外部のサービスを受けることが出来る。

経費は家賃、食費などを合わせておおむね毎月12～25万円で(『読売新聞』2005年9月25日朝刊付け)、ケアハウスについては『最新ケアハウスガイド』(中央法規 2005年)参照。

- 4) 調査時においては一般的であった「痴呆」という用語を用いたが、本報告においては現在用いられている「認知症」とした。
- 5) 社会福祉法人全国社会福祉協議会高年福祉部『ケアハウスにおける生活支援機能のあり方に関する研究報告書』2002年。
- 6) 総務庁長官官房高齢社会対策室『平成10年度 高齢者の日常生活に関する意識調査結果』1999年。
- 7) ここでいう読書とは、本・経典・雑誌などを読むことをさしている。
- 8) 『読書世論調査2005年版』(毎日新聞発行)によれば書籍・週刊誌・月刊誌のいずれかを読んでいる人の割合を年代別に見てみると、10代後半(16～19歳)が85%で最も多く、次いで30代81%、20代80%、40代78%、50代74%、60代65%、70代以上45%となっており、加齢とともに読書をする者の割合が低下する傾向を示している。





## ■ 読書及び関連事項に関する質問

問 11 余暇をどのように過ごしていますか。(あてはまるものすべてに○をつけて下さい)

1. テレビを見ている
2. なにもしない
3. 施設の行事やクラブ活動に参加している
4. ラジオを聴いている
5. 他の利用者とおしゃべりをしている
6. 作業(掃除や洗濯物たたみなど)をしている
7. 散歩をしている
8. 読書をしている。
9. 外出する
10. その他( )

問 12 あなたは1ヶ月の間に、どれくらい読書をしますか。

1. よく読む
2. 時々読む
3. あまり読まない
4. まったく読まない

※ ここでいう読書とは、本・経典・雑誌などを読むことをさします

問 13 (問 12 で 3、4 と答えた方) 読書しないのはなぜですか。(あてはまるものすべてに○をつけて下さい)

- |                |                   |
|----------------|-------------------|
| 1. 興味がないから     | 5. 他に趣味、娯楽があるから   |
| 2. 目が不自由だから    | 6. 周りが騒々しいから      |
| 3. 身体が不自由だから   | 7. 自由に本等が手に入らないから |
| 4. 読みたいものがないから | 8. その他( )         |

問 14 (問 12 で 1、2 と答えた方) 一日あたりの平均読書時間はどれくらいですか。

1. 2 時間以上
2. 1 時間以上、2 時間未満
3. 30 分以上、1 時間未満
4. 30 分未満

問 15 どのようにして本、雑誌等を入手しますか。(あてはまるものすべてに○をつけて下さい)

- |                |             |
|----------------|-------------|
| 1. 家族に持ってきてもらう | 4. 施設で本を借りる |
| 2. 職員に購入を頼む    | 5. 図書館で借りる  |
| 3. 店頭で購入する     | 6. その他( )   |

問 16 本、雑誌等に関する情報はどのように入手していますか。

- |                |            |
|----------------|------------|
| 1. 本、雑誌、新聞、テレビ | 5. 店頭      |
| 2. 家族          | 6. インターネット |
| 3. 職員          | 7. その他 ( ) |
| 4. 友人・知人       |            |

問 17 現在、読書をするうえで不満がありますか

1. 非常に不満である
2. やや不満である
3. あまり不満がない
4. まったく不満がない

問 18 (問 17 で 1、2 と答えた方) 具体的にはどのようなことですか。

問 19 公共図書館で行われている下記のサービスについて知っていますか。(知っているものすべてに○をつけて下さい)

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 1. 大活字本   | 4. 宅配サービス |
| 2. 出張貸し出し | 5. 移動図書館  |
| 3. 録音図書   | 6. 移送サービス |

問 20 あなたが読書に関して望むサービスは何ですか。(あてはまるものすべてに○をつけて下さい)

1. 大活字本
2. 拡大鏡
3. 照明
4. 移送サービス (図書館への送迎)
5. 宅配サービス
6. 出張貸し出し (図書館から施設への一定量の貸し出しで、一定期間に入れ替える)
7. 移動図書館
8. 本の専門的知識を持った人の援助
9. 録音図書 (本をテープに吹き込んだもの)
10. 本等に関する最新の情報の提供
11. その他 ( )

問 21 あなたにとって読書はどのような意味を持っていますか。(あてはまるものすべてに○をつけて下さい)

- |            |                                 |
|------------|---------------------------------|
| 1. 娯楽、楽しみ  | 6. 暇つぶし                         |
| 2. 情報収集    | 7. 心のやすらぎ                       |
| 3. 生涯学習    | 8. ぼけ防止                         |
| 4. 懐かしみ、回顧 | 9. その他 (                      ) |
| 5. 習慣      |                                 |

問 22 あなたは読書が好きですか。

1. 好きである
2. まずまず好きである
3. あまり好きではない
4. 好きではない

問 23 若い頃の読書習慣はいかがでしたか。

1. よく読んだ
2. 時々読んだ
3. あまり読まなかった
4. まったく読まなかった

問24 若い頃に図書館を利用したことがありますか。

1. よく利用した
2. 時々利用した
3. あまり利用しなかった
4. まったく利用しなかった

問25 読書に関してご意見があればお聞かせください。

■ ご協力いただき、誠にありがとうございました。お答えいただきましたことは、高齢者の読書を支援するための貴重な資料として活用させていただきますので、その他の目的に使用することはありません。